

地理の視点で捉えたイスラーム

厚木商業高校 比 佐 隆 三

一、はじめに

地理と歴史の相互交流を深めるといふ試みが、本年度からスタートした。第一弾として、地理分科会より数名が世界史研究推進委員会にオブザーバーとして参加した。ここでは、イスラームを地理の視点で捉えた内容を、授業で実践した事例に基づき述べてみたい。

二、導入（国旗のデザインの共通点）

実際の地理の授業で行っている手法で、黒板に八か国の国旗を明示してアジア・アフリカの二つの地域に分けて質問する。生徒の関心はかなり高く、地図帳で国の場所を確認しながら国名を答えさせていく。正解は、マレーシア・パキスタン・トルコ・トルクメニスタン・ウズベキスタン（以上はアジア）、チュニジア・アルジェリア・モーリタニア（以上はアフリカ）である。

これらの国々の国旗に共通するデザインは、月と星である。この二つは何のシンボルであるかを質問する。答えはもちろん、イスラームのシンボルであり、日本の「日の丸」は太陽がシンボルであるのに対し、夜に登場する月と星との対照性を力説する。つまり、日本人は太陽が登場する昼を重視し、イスラームの人々は月と星の出る夜間が重要な活動時間であることを強調していく。

その理由として、イスラーム諸国の多くは熱帯や乾燥地帯に属し高温の昼を避け、日没後の夕方から夜にかけて活動する習慣が根強



マレーシア



トルコ



チュニジア



モーリタニア



アルジェリア

いたためである。ちなみに、世界最高気温を記録した国はイラクで、クウェートの国境に近いバスラ市で五八・八℃（一九二二年七月八日）であり、現在も破られていない。また、イスラーム暦は月の運行に基づく太陰暦を使用し、イスラーム教徒の五行の一つである断食（ラマダン）では、日没から夜明けまでの時間帯は飲食が許されていることも記しておく。以上が導入で、以下はイスラームの基礎的事項についての展開である。

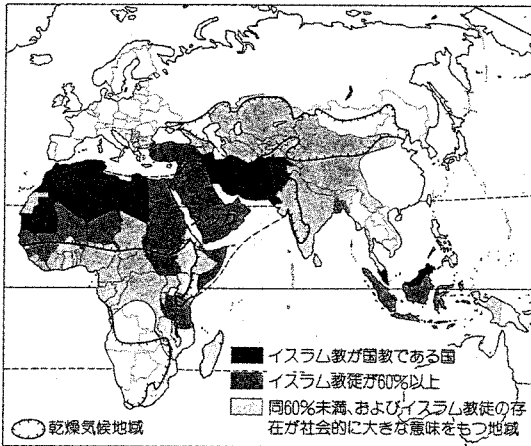


図2 イスラーム教徒の分布（イスラーム事典ほか）
イスラーム教は中世のアラブ民族の侵略・交易活動によって、海・陸から各地に伝えられた。

三、世界人口の1/6はイスラーム教徒

現在、世界全体ではイスラーム教徒が約二億人を占めており、世界三大宗教の一つとなっている。その分布を見ると、東はインドネシアから始まって、東南アジアからインド・パキスタンへと続いて、アラビア半島を経由して北アフリカのほぼ全域を占める。

自然環境としては、広大な砂漠とステップが大半で、年間降水量が非常に少量であり気温の日較差が大きいことが特色である。農業はオアシス農業が卓越して、遊牧も行われている。言語は、イランでのペルシャ語を除くと、ほとんどの国ではアラビア語を使用。

西暦六一〇年頃、アラビア半島のメッカ（マッカ）でムハンマドが布教を開始してからは、アジアやアフリカの国々に勢力を拡大しつつあった。ヨーロッパもイスラームの脅威に何度も見舞われた歴史を有する。一四五三年にオスマン・トルコにビザンツ帝国が滅ぼされた後でも、二回にわたってオーストリアのウィーンが包囲されたが、辛うじて撃退した。また、イベリア半島は長い間イスラームの支配下に置かれ、スペイン・ポルトガルなどには現在もその文化の影響が残っている。

四、先進的なイスラーム文化

①アラビア数字

インドから伝えられた九個の数字とゼロ記号によって、どんな数も簡単に表現できる。イスラームの科学・技術の進歩に大きな貢献をしただけでなく、世界標準の数字となって現在も使われている。

②錬金術から発達した化学

アルコール・アルカリ・ソーダ・シロップ・シュガーなどの語源はアラビア語に由来し、当時の発達していたイスラームの化学からヨーロッパ人が導入した。その他、医学・数学・天文学・地理学なども発達した。

③アラビアン・ナイト（千夜一夜物語）

「シンドバッドの冒険」などで、世界的に有名な文学作品。これは、イスラーム商人が活発な交易活動を行った証拠でもある。

五、石油開発と経済格差

西アジアと北アフリカにかけての地域は石油の宝庫で、世界全体の原油確認埋蔵量の七〇%が集中している。一九〇八年にイランで本格的に採掘がスタートしたが、利益を独占していたのはメジャー（国際石油資本）と呼ばれる、欧米の大資本の会社であった。産出国の石油収入は僅かであった。

第二次世界大戦後、ナシヨナリズムの高揚はこの状況を一変させる。一九六〇年にOPEC（石油輸出国機構）、一九六八年にはOPEC（アラブ石油輸出国機構）が相次いで形成され、メジャーに対抗する勢力へと成長していく。一九七三年の第四次中東戦争では、OPECが原油価格を引き上げて石油危機というパニックを起したが、産出国の石油収入の大幅増を獲得した。

しかし、産出国と石油を産出しない国との格差が次第に表面化すると共に、産出国の内部における貧富の格差も拡大し、大きな社会問題となってきた。こうした情勢を背景に、再びイスラームが見直されつつあり、一九七九年のイラン革命は「イスラーム原理主義」の大きな勝利とされている。

六、深刻な地域紛争

①パレスチナ問題

一九四八年のイスラエル建国以来、アラブ民族との間で四次にわたる「中東戦争」が起きている。現在も、イスラエルとPLOの暫定和平が模索されている。

②レバノン内戦

一九五八年にキリスト教徒とイスラーム教徒との対立から始まり、泥沼の内戦でレバノンの国土が荒廃した。

③イラン・イラク戦争

一九八〇年～八八年にイラクがイラン革命を食い止めるために引き起こした戦争で、互いの国力を消耗して湾岸戦争の遠因ともなった。

④湾岸戦争

一九九〇～九一年にイラクがクウェートを侵略して始まった戦争で、最終的には欧米の多国籍軍が参戦して終結した。

七、中東と西アジア

「中東」という用語は、かつて大英帝国の植民地省がアジアの植民地の地域区分で使用したこと由来する。「中東」に明確な定義はなく、時代と共に示す領域も変化してきた。イギリスが使い始めたこの用語はヨーロッパ中心の見方で、日本で使用することには問題があると思われる。

①近東

オスマン・トルコ帝国の領土にアラビア半島を加えた領域

②中東

イラン・アフガニスタン・インド・ビルマ（ミャンマー）を総

称して呼んだのが始まり。一般的には、北限がトルコ・南限がアラビア半島、東限がアフガニスタン・西限がスーダンという範囲が「中東」であるが、確かな定義はない。

また、「中東」＝「イスラーム圏」という概念で使用される場合も多い。

③極東

日本・韓国・中国を総称して呼ぶが、東南アジアを加える場合もある。

※地理の用語では、「中東」は避ける傾向が強い。地理の教科書では、「西アジア」という地域区分が使用されている。

〈参考文献〉

小杉 泰 『イスラームとは何か』 講談社現代新書

藤村 信 『中東現代史』 岩波新書

宮田 律 『イスラーム世界と欧米の衝突』 NHKブックス